

推薦する取り組み	園館名
高齢ニシゴリラに対するヒト用補助食品適用の試み ～加齢による身体機能低下に備えて～	公益財団法人 日本モンキーセンター

推薦理由

動物飼育や獣医学の進歩により飼育動物は長寿化の傾向にあり、老化による身体能力低下へのケアが重要と考える。体調の維持回復にはカロリー、栄養の摂取が欠かせないが、衰えにより普段食べているものを食べなくなり、回復が長引き体調が悪化するケースもある。特に大型動物は大量の食物摂取で体を維持しており、十分な量の食物が摂取できないことで身体能力が落ちさらに摂取できる量が減少する、という悪循環で急速に体調を崩してしまう。

同園で飼育されているニシゴリラのタロウも国内オス最高齢の老齢個体であり、今後加齢や体調不良で摂食能力や食欲の低下が想定される。タロウは繊細な性質のため、普段与えているものを食べなくなった際に新しいものを与えてもすぐに受け入れない可能性も高く、上記リスクが課題となる。そこで、同園公認のサークル活動として、飼育担当者への提案と連携により、タロウの体調に問題がない今のうちに食欲や摂食能力低下時にも摂取できる補助食品を調査検討した。

ニシゴリラはヒトにとっても近い動物であるため、摂食嚥下機能の低下した障害者、高齢者向けのヒト用食品から、嚥下しやすくするとろみ剤と、嚥下しやすく少量でカロリーと栄養素を摂取できる栄養調整食品を候補とし、タロウに与えた際の反応を観察した。

とろみ剤は普段タロウに与えている飲料に溶かし込み、タロウが自由に手に取れる形で与えた。栄養調整食品は飼育員がタロウに一口与え、食べるようであれば残りを容器ごと渡す形で与えた。複数の製品で調査を行ったが、タロウは全てを好んで完食しており、とろみ剤および栄養調整食品を活用できる可能性を確認できた。

上記調査を行った数ヶ月後、タロウが急に体調を崩し、食物をほとんど口にしない状態となったが、調査で確認を行った製品を与えたところ全て完食した。タロウの体調不良は数日で回復し、今回の活動で備えていた効果があったと考えられる。





推薦する取り組み	園館名
高齢のニシゴリラの嚥下・身体機能低下時に備えた 給餌内容を考える取り組み	公益財団法人 日本モンキーセンター

推薦理由

日本モンキーセンターではオスで日本最高齢 52 歳のニシゴリラを 1 頭飼育している。今後の懸念点として身体機能や嚥下機能の低下による咀嚼困難や嚥下困難といったことがあげられた。

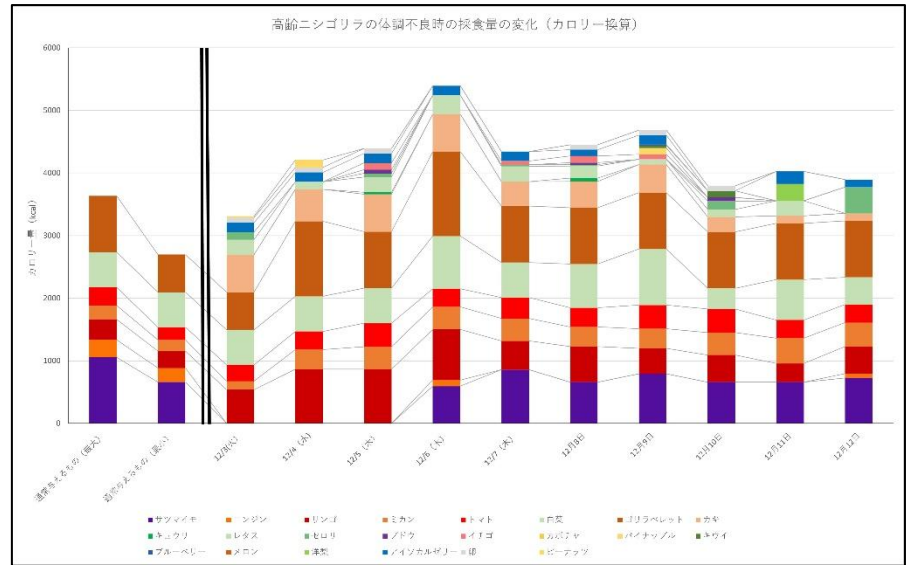
そこで連続講座受講者の有志で構成されたエンリッチメントサークル（歯科医や介護士らを含む）と協力し、当該個体の食事が困難になった時に備え、市販されているトロミ調整食品や嚥下調整食、栄養調整食の嗜好性の調査を 2024 年 6 月から 9 月にかけて計 3 回おこなった。その結果、どの食品も嗜好性を示したため、当該個体の補助食として使用できる可能性が示された。

2024 年 12 月と翌 3 月に当該個体が体調不良で食欲減退した際には、ニンジンやサツマイモなど通常完食する硬い飼料もほとんど残すようになったため、フルーツなどでカロリーを補った。しかし、鎮痛剤や抗生剤の経口投与にフルーツを使用することで、フルーツ自体を警戒し口にしなくなる恐れがあった。そこで調査によって嗜好性が示されており、かつ、普段の給餌量への影響の少なかったゼリータイプの嚥下調整食に薬を攪拌させ給餌したところ、問題なく給餌可能で嗜好性も変わることがなかった。これにより 12 月の体調不良時には通常時サツマイモとニンジンで確保していた 900～1400kcal をフルーツで補いつつ、継続した投薬を可能となった。投薬 4 日後からサツマイモの採食を再開し、徐々に通常量へと採食の状態が改善していった。

高齢個体を飼育していくうえで、健常時から身体機能の低下を見越した給餌内容を精査していたことで、急な体調不良時にも応用でき、改めてその重要性が示された。人間の医療関係者との連携により、飼育担当者だけでは持ちえない知見や情報を活用することができたのも特徴的だと考える。またこの取り組みが他園館や他の高齢類人猿個体のケアの参考になることを願っている。



飼育しているニシゴリラ



通常時の給餌量と体調不良時採食量の推移



通常時、足の裏をしっかりと地面につけている



左足を若干かばい歩きしている
(2025 年 3 月体調不良時)